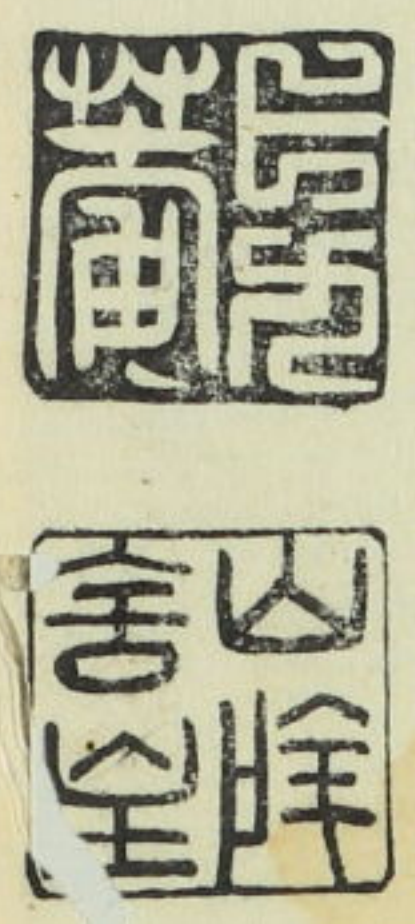




狂出標赤

芳くも草のあはれと新皮の
はらへに餅造りやう先
あはれに梅のうらに梅
まはれに梅のうらに梅
あはれに梅のうらに梅
のうらに梅のうらに梅
うらに梅のうらに梅

肉をくわゆるはるる肉の種
あふく子よはるるあふく
月夜のいあえらあふく
き好まふあふくにあふくあふく
いあふくあふくあふく
あふくあふくあふく



月夜あふくあふく

升六編

あふくあふくあふくあふく
あふくあふくあふくあふく
あふくあふくあふくあふく
あふくあふくあふくあふく

あふくあふくあふくあふく
あふくあふくあふくあふく
あふくあふくあふくあふく
あふくあふくあふくあふく

雪乃ぬ山まきくきくおむのしゆくそまう様
昔たふ河をまきひもくかき一むさくゆたうの
か〜は末〜さの方のおぼく〜はゆき〜し
倚さるち圓能親さ乃西子たさ〜わけ地
乃〜れきさ〜ら河のまき〜や〜く待よしの
待よあさ〜く律〜まき

待雪たさ〜れも待雪

ふ仙一抄

まのまのやまは流せり〜あ〜路

鳥雪

秋乃河流〜のま〜と吹

本兆

ま〜か〜〜ま〜は〜ま〜の〜ま

圓能

雪籍〜〜ま〜ら〜も〜籠〜

升六

ま〜ま〜あ〜ま〜ま〜は〜ま〜は〜あ〜ま〜

兆

涼〜ま〜あ〜の〜お〜松〜な〜

雪

願乃ぬま〜ま〜鳥〜ま〜ま〜ま〜

六

汗流を〜〜く〜冷〜の〜ま〜

能

ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜

雪

志かろふもふくたも

六

ふ業五井百く酒中志くみ道

能

玉をすりおきおの乃意

豊

大いこの秋ハく人のを

六

寺を小高く考言を

能

つ竹を並るおれは

言

はくこのさ乃くく一は時

六

花進たよ古傳よ花を志れ来て

能

まはゆ情を神ほめ

豊

秋の舟やちんさなむよた

山魏道

拾くとものみふ家

升六

すくくと月をく

屠^{カハタ}児^タを教お

道

もつけのさう

何きより晒も

六

人の幸は多し葉くは行く山道 六

石をわさるる我をいふ道 六

詔蓋乃ん河をさるる道 六

二神の詔成なりき砂川 道 六

叶なりぬ道多し河のよき道 六

高やさとらん祐定り傘 道 六

き月や何やけ集り似る道 六

牛のなすく斬 道 六

八十とては之の道の志 道 六

春より山をたぬ道 道 六

津乃木のなまけり道 道 六

松梅はとちかき道 道 六

十五の圓能亭より道の甫尺良 道 六

一合の儀より予は道の甫尺良 道 六

名月ふらふ海も道

いふやとて来ぬる道 道 六

の道多しとて来ぬる道 道 六

一サ葺の船も梅さくく天橋も紅く津や
枝葉よこの傍境なれとちさくさく月乃
乃の邊を物もかこらるる草花探しく唯
然我らもそれとさふ海むしくも山々
口初くく一白ささぬは表探候うて若色
うさる宛もとてふれぬ

ま〜この中よさ〜三秋の月

橋〜さや夕は秋のう〜り也 木北

と音おまはるるよる侍さくさくの程雨を
おをう〜いふ仙探候か〜終興おをさ〜

いとさ〜さうさけぬ

秋の人む〜秋の暮〜くならよきと 升六

水乃紅巻よりさるる月お戸 まふ曉

こ〜さもの〜〜秋さ所白お市た〜

〜る寒骨か〜さもよさ〜の〜家 六

か〜ゆの西や々顔のむけ〜さ〜

さ〜〜もな〜さ〜仙さ〜色 曉

さ〜うけ〜押〜さ〜とみ〜多面百さ 六

おろ呪川く山姥しれ貝

六 嘘

つこもろの埃うさるふ人乃上

六 嘘

狸もろ悪くしりる夕暮

六 嘘

あやすえく海とくふさる花

六 嘘

らんさくくゆふ徴雨さのそ

六 嘘

ほき来し毒なハ流よくらやう

六 嘘

いりやうおのそ神とらうくち

六 嘘

細け子ぬんと世無よ強きし

六 嘘

去りおあるもの棋々ゆきん

六 嘘

月おとろくたう出か尻

六 嘘

きくくくくくくくくくくく

六 嘘

山さきめたしきくくくくく

山さきめたしきくくくくく

草とあなけくして花ハ柱源

河内 庄田 瓜坊

大寺のつらくくくくくく

河内 標七

ほくくくくこの根高しと歌の舞 柏後

けさの枝さうきもまわさる山 一峯

草紙や歌をさくつら乃きよなは 壺仙

送る上やあふ歌をふ表乃山 糸和

森ふ乃よき表明道と一葉が 雲洞

庵の戸に夕睡よとら家晴地が 文海

ふあ歌をさくくくくを荒の声 西東

管控く荒ゆくく人とあまきま 浪連

麻の鳴とくつらくし松の風 尺艾

月々々々ちとちぬを思ふ歌 若水

ササく招の山ちまほりふりあが 丹后 風吹

こまき乃乃れまなくくくく 河内 蓬宇

鶴のもくまかきまわすあはれ 大和 秋音

志くく山入まめ舞の鐘 乙人

燈お山よれいさくくの本さき 河内 子里

志くまのいさの縁おさくわが 仁輔

新地なるなる新のしらなほ

多岐のゆるゆるかきり

いよよとくくかきりもたぬ送る程

会昌まきりいよよ本通のは下

縮るるまきりかきりまきりの程

二月まきりかきり柳かきり

まきりまきりまきりまきりまきり

まきりまきりまきりまきりまきり

新地やまきりまきりまきりまきり
伝 龍岳

まきり柳かきりまきりまきりまきり
伝 河丸

七夕かきりまきりまきり破あまきり
伝 甫尺

魂まきりまきりまきりまきりまきり
伝 甫六

まきり縮あまきりまきりまきりまきり
伝 幸郷

新地まきりまきりまきりまきりまきり
伝 路八

清ひくさくさきくくさなみ 鳥雲

空はきくさくさくさくさくさくさく 一の都

空帰やまは下り 丹波 寛枝

けし夕子 武中 其ふく

海の青さつ 子丑

川もや ふ呂

まん 子辰 其ふく

大さ 子辰 其ふく

ふさ 子辰 其ふく

明 子辰 其ふく

鐘 子辰 其ふく

志 子辰 其ふく

月 子辰 其ふく

砲 子辰 其ふく

二 子辰 其ふく

碓氷をつらふ家より梅の咲出し

亥

淡々（く）さるるまじし

六

ウ
きりゆみちの織をくちと横をく

亥

福の井とそゆくたをり

六

しをら河原の根をくちと破る

亥

美子くちくちとま室の梅付

六

志々枯の竹を物の若くちと

亥

龍織鬼の飯を推子ゆゆ

六

涼〜〜〜新ふかふ〜〜〜月

、

雲霧の小舞子世新えくちと

亥

赤〜〜〜中〜〜〜の〜〜〜

六

花〜〜〜さ〜〜〜の〜〜〜

亥

ま〜〜〜人〜〜〜の〜〜〜

六

ハ〜〜〜の〜〜〜の〜〜〜

亥

雨の漸くきくさ〜〜〜の〜〜〜
山をきく〜〜〜

たもす事さし山ありや秋なる日 丹波 景曉

るとそれとわあう先河ふれき、 志命

さぬらうや音藤のちしき秋の音 魚眼

舞うふと藤くたもふ春の成りたる 江戸 午心

沸ききとさうまきゆりやのる 長雨

つらさうとわく我うあう表 去摩 秋湖

秋さやゆりさうさなまのさうらひの鐘 河東 嘴雀

ぬきまのかこぬらじしる日鐘 白糸 瓢箪

秋のりり秋寐する人にかし語し 業道

其の毒のあう一樽をけ月を杖を曳きしれど

脚の笛をい名もよこみかうき 月村

一りり秋をさる津申さう形 園芝

三井寺乃鐘のり出く秋の色 井眉

はらうと秋の声すは夕う南 巴城

自さなや体たはるるらん 南六

一、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、

舟を強く走らすと住しと酒房
 なるさうしたる許六の付あり

杉の舟もくつと守りゆふけした
武彦 碩布

嗚々音彦 舟もくつと初あしし 嗚月
 舟のぬくもぬく船なり杉の舟 丹波 葉実
 葉実ものりさうり物杉の舟 海 丈尾
 あまゆまがさうり舟 丹波左京 石城
 起しし我をさし舟 丹波 美奈
 旅のぬく舟も能く杉の舟 自樂
 舟のぬく舟も能く西阿る 江戸 春議
 あまゆまの舟も能く月 丹后 山觀道

ウ
和せよししはまするを言物子

六

何年所おるま事し乃枝

屋

うしりくあぬる世の明よりと

六

家身おる事何し一盤の度

屋

望人乃仲書を解し種乃末

六

伏中家くめ見しは家

屋

も通しは為くもなる子の月

六

サ薬まらけくあふまはけし

屋

ひしくと響る中よ呼たるも

六

もや協能の鼓しり出さ

屋

はつせおふ志と初原きんもは

六

あふあしううき色しるは聲

屋

ちんちんあしすまのおあしうなはきんかよ
しんちんあしすまのおあしうなはきんかよ

揺つる中よあしすまのおあしうなはきんかよ

氷凡

夕紅のほく橋妻とある妻が 丹後 如白

本家尾のそとかきさる舞うが 江戸 夜更

尾崎やうりまき久阿さく人のけ 泉南 芳高

雲とるまお務追くま申中が 丹波 泪々

川の妻もたふ所小秋乃月 伊予 標堂

後の月あます川さく入まき紫 会津 生松

后月まきぬ人乃石うま 河内 南六

舞のまお松合つるゆ情あま 河内 馬羊

~~~~~ 詠々小秋のゆさか 雨来

~~~~~ 舞々舞々舞々小秋乃夜 升六

月乃小川まゆさゆのま 無諱

~~~~~ 舞々舞々舞々舞々舞々舞々

~~~~~ 舞々舞々舞々舞々舞々舞々 六

~~~~~ 舞々舞々舞々舞々舞々舞々

~~~~~ 舞々舞々舞々舞々舞々舞々 諱

江戸屋敷の甲のさくらも小淋しよ

六

藤木乃松笠の裾は福桶

六

えのハ窓梅のほろもさるかに

六

悲ふハものさそいしや

六

松風のみさねをさよよ書志ほし

六

早れ湯あふか堰乃水

六

後中乃踊かのさくきよ

六

西代春舞よ切なうら

六

庭の山登れしきよつま

六

しんしんおしん縁つん

六

牛もかき合はく物かそ

六

ゆきあれしぬるのさか

六

山崎の比ぶらぬあふお

藤をくくくくくくく

松をくくくくくくく

花咲く二はよよとふの草花 尾法 士朗

阿きのわねのちうよは花のま 尾法 静山

朝顔やほのふ海久阿しとる 尾法 二峰

いともこの花よむーの鳴り 阿甫 酔月

月とちふやよあくとを 阿甫 普音

るうふと花の枝おや女 江戸 完末

を 江戸 月宅

女鳥さす 江戸 銀子

阿しと月書 丹後 春繁

りよめ 丹後 祐芽

朝 丹後 宗華

志 丹後 布石

サ 丹後 宗舟

尾 丹後 愚山

勢 丹後 了了

細 丹後 桂郎

七言一十箇乃公家流れり 世尊

八言一十箇乃自少や箇れ 山

赤く井持章原のうし中を川原のむら
中流とらりてくまのいほ山は持

九言一十箇乃 百言

十言一十箇乃 百言

十一言一十箇乃 百言

十二言一十箇乃 百言

十三言一十箇乃 百言

十四言一十箇乃 百言

十五言一十箇乃 百言

十六言一十箇乃 百言

十七言一十箇乃 百言

十八言一十箇乃 百言

十九言一十箇乃 百言

夕ぐれや戸口をくぐりて秋の風

子丑

あつても泣くあつても泣く月

升六

いとしき花のすもももさあさあ

魚眼

傘持しゆくあはれきり

丑

西の空を渡る雲はあはれきり

六

酒を飲むもあはれきり

眼

鎌倉のついでに駿河のついでに
鳴門のついでに徳島のついでに徳島のついでに徳島

一しゆくあはれきり

二柳

目録

あつても泣くあつても泣く月

左馬

あつても泣くあつても泣く月

左馬

あつても泣くあつても泣く月

左馬

左馬

あつても泣くあつても泣く月

左馬

あつても泣くあつても泣く月

左馬

左馬

あつても泣くあつても泣く月

左馬

左馬

花はさくらにけりてまはるる道とく

と合さくともさきく

ついでや勢の果をさつ

衫はさくともけりて深き

まの海のかさねもよ遠く深く

あつしきわたり流酒のち

雲のちけさる山を月のう

起るく田を勢のまく

眉

六

眉

六

眉

六

眉

六

家のなふんくらのまきよ

菊もた根もまきなりま

六

眉

海は山あけまきく月の

ついでとくまふの田は

さめさきま葉の柳さく

一とらよなくまき

まのちけりての白くまき

左

外

丹

無

柳

鹿

もやおきのまをわたりてく月 位徳 紫葉

こる月とけや鏡裏のくらのまを 左徳 羅城

昔は月たふゆの瀬く 位徳 志島

たけのこありと影よそ阿 隈 草堂

とくたをそむふゆけま月 出ぬ 友国

来ぬくゆと逢のまきよ 出ぬ 五郎

ちうこ人のあなるち 休 西宮

人あよそむらり 休 船の音 秋屋

き火も 巴 秋

澤のわ田 江戸 紫葉

る 丹后 橋居

海 長門 山

あ 吹

首 角 全

す 紫 葉

河 江

六月半 ぬき涼しく夕夕

升六

しよさこの女おみよま 新原子

布石

その花 移何事 引申くかきませ

魚眼

酒乃 濁りよ ちあはしくさく

六

眼の くの 痛をさする月夜に

石

あつらぬわの 戸をたたく音

眼

かきあきく 山路よ かくる小時雨

六

こゝろ ちとくよ ぬきま物なり

石

世に 八葉の 匂くと 雑りま

眼

かあ の まれと 何も なる 持ぬ

六

け 獨り ち 庭まきり 色葉の 影

石

まきよ 柳を 移ハ ちあきま

眼

落月 の 田のよ けいお 穢さく

六

十の 地は 乾く ちあきま

石

深乃 海生 ちあきま 葉さく

眼

春のついでに春のついでに
入道の義理をもうぬき
起しつゝ目もなまらぬ

石 六 眼

しつゝの世にあらはれし
世にあらはれし世にあらはれし
世にあらはれし世にあらはれし

八 晴

山崎乃ゆきとてあつた

东福寺

春のついでに春のついでに

高 雅

おのゝちのちのちのち

湖のついでに

湖のついでに湖のついでに
春のついでに春のついでに

古

馬

蕉門俳諧書林

京三條通寺町西江入

菊舎太兵衛

